

No. 1147

下田風土記

東京から3時間、伊豆半島の南端にある下田は古い歴史の町である。1854年、ペリーのひきいる黒船が来航。鎖国日本は大騒動となった。

25才の吉田松陰は日本脱出を試みたが失敗、拘禁された。アメリカの総領事、ハリスが執務した玉泉寺。境内には多くの外国人墓碑がある。「お国のためじゃ」と言われ17才でハリスの側女となった唐人お吉、宝福寺にあるお吉の墓は線香の煙がたえない。開国の町、下田の悲しいロマン。そんなロマンを知ってか、知らずか海岸に咲き誇る野生の水仙。それが美しければ美しい程哀れで悲しい。

竹の寺

— 静岡県・柴屋寺 —

静岡市丸子、三方を山に囲まれた閑静な地に昔から竹で知られる柴屋寺がある。この寺は今から約470年前、室町時代に連歌師、柴屋軒、宗長が建てたという閑居。

現在、16代目の住職、村田俊道さんが寺を守っている。寺の本堂の前の庭園は宗長、自ら、禅の心と詩魂を打ち込んで築いたものと言われ、西方にそびえる天柱山をたくみに取り入れた借景庭園である。竹と寺のかかわりは、宗長が造園の際京都の嵯峨野の竹を移植したことから始まる。

“幾若葉はやしはしめの園の竹” とはその時の句。

寺の裏手、東山の竹藪は冬の朝、静かに凍てついていた。住職は周囲が45センチほどもある、みごとなモウソウ竹を秋から寒冬にかけて伐採する。その数は年間百二、三十本にのぼる。

夜、竹でいっぱい四畳半ばかりの仕事場、竹細工に打ち込む住職の姿がある。最初はタバコ盆に入れる灰ふきが主だったが今では灰ざら、コップ、花器など種類もふえた。簡単な小刀とノコギリを使い、竹本来の姿を残し、素朴さを失わないようにていねいに細工していく。そこには張りつめた厳しさは微塵も感じられない。

手先が器用で趣味人の宗長は余暇にこの竹でさまざまな細工を作って、山号の“吐月峰”を焼き印で押し、訪れる茶人仲間に贈ったという。

寺を守り、竹細工の伝統を存続するのが私の使命と住職の村田さんは孤軍奮闘している。